

十文字学園女子短期大学研究紀要第31集 2000年

## イギリス・ドイツ・日本における高齢女子の積極的生活態度と意識

## —高齢前期と高齢後期との比較—

The survey of elderly women who have positive attitude and  
consciousness of life and live in England, Germany and Japan.  
—Comparison between 64~74 years old and over 75 years old—

古松 弥生\*  
Yayoi Furumatsu

横田 京\*  
Kyo Yokota

山口 典子\*  
Noriko Yamaguchi

櫻井 典子  
Noriko Sakurai

## I. 緒 言

活力ある高齢社会を築くためには、高齢者自身が積極的生活態度を持ち、意義ある生活をする必要がある。高齢者問題についての文献は、従来、医学・心理学・社会科学などの分野で多数あり、近年は学際的・総合的な学問としての老年学の文献が日本でも出版されている<sup>1)2)</sup>。アメリカでは、早くから老年学会が設立され、毎年、雑誌がだされている<sup>3)4)</sup>。

高齢者の生活と意識についての調査は、国際比較調査<sup>5)~8)</sup>や、著者らのグループの調査<sup>9)~15)</sup>もあるが、積極的生活態度を持つと思われる高齢者を対象とした調査は見当たらない。本稿では、現在、積極的生活態度を持って生活していると思われる高齢者を対象に、どのような意識を持って生活しているかを探る目的で、イギリス・ドイツ・日本の高齢女子について「高齢者に意義ある生活をもたらす要因」を高齢前期と後期について比較検討を試みた。

## II. 研究方法

イギリス、ドイツ、日本在住の積極的生活態度を持つと思われる64歳以上の高齢女子を対象とし、1994年6月から1995年9月の間に留め置きアンケート調査を行った。

イギリスでは、ヨーク州在住のサードエイジユニバーシティなどで活動している88名、平均年齢73.8歳、ドイ

ツでは、ハイデルベルグ在住の教会関係で活動している117名、平均年齢76.5歳、日本では、関東地区友の会に所属する218名、平均年齢72.9歳である。

積極的生活態度を持つと思われる対象の選定は、イギリスは、国際家政学会の会員の一人に、ドイツでは、ハイデルベルグの教区牧師夫人に調査趣旨を理解してもらい依頼した。

積極的生活態度を持つと思われる対象の特徴を見るためには、比較資料として、無作為抽出の総務庁「老人の生活と意識、第3回国際比較調査結果」<sup>7)</sup>および新座市在住990名の女子の調査結果<sup>14)</sup>を用いた。

年齢による影響を見るためには、64歳から74歳までを高齢前期とし、75歳以上を高齢後期とし分析を行った(表1・表2参照)。以下、前期・後期と称する。

調査項目は、基本属性11項目、生活と意識に関する質問29項目である。このうち、今回は基本属性4項目、生活と意識に関する項目11項目、計15項目を分析した。

## III. 研究結果

## 1. 積極的生活態度

積極的生活態度を見るために次の質問を設定した。①自分なりにおしゃれをして、他人とちがう個性をあらわしたい。②世間で話題になっている小説や映画は見てみたい。③着たことのない色や、流行をとり入れた服でも似合えば着てみたい。④初めての所へ出かけたり、旅行をするのも苦にならない。⑤珍しいものや食べたことの

\*十文字学園女子短期大学

\*The Course of Human Environmental Science

キーワード：イギリス・ドイツ・日本、高齢女子、積極的生活態度、高齢者の意義ある生活、高齢前期と後期との比較

表 1. 調査対象

	高齢前期 (64～74歳)	高齢後期 (75歳以上)	合計人数	年 齢 平均・標準偏差	備 考
イギリス	50	38	88	73.8±6.3	ヨーク州在住
ドイツ	50	67	117	76.5±7.2	ハイデルベルグ 教会関係者
日 本 (友の会)	143	75	218	72.9±5.6	関東地区会員

表 2. 比較対象および調査方法

	高齢前期 (64～74歳)	高齢後期 (75歳以上)	合計人数	備 考
日 本 (新 座)	470	520	990	新座市在住 無作為抽出 留置法
総務庁調査 (第3回)	270	78	348	無作為抽出 面接法

ない料理も食べてみたい。⑥新しい便利な家電製品などは自分でも使いこなしたい。⑦いままで知らなかった人と知り合うのは楽しい。⑧若い人たちと話しをしたり、同席するのはおもしろい。⑨ふだんの生活で、みなりをととのえるために鏡をよく見る方だ。⑩疑問のあることは人に尋ねたり、自分で調べて、知識を増やしたい⑪テレビ・新聞のニュースや時事問題には興味がある。など11の質問について「そう思わない」「どちらでもない」「そう思う」のどれか1つを答えてもらった。その結果を、年齢の前期と後期に分け、SD法により図示した(図1-1～1-4)。

新座の一般市民では、どの質問も前期と後期との差異が顕著にみられた。(図1-1)。これに比べ、友の会(図1-2)、イギリス(図1-3)は高齢前期と後期との差があまりない。ドイツは「初めてのところへ出かけたり、旅行をするのも苦にならない」と「珍しいものや食べたことのない料理も食べてみたい」の2項目は差があり、後期の方が前期より「どちらともいえない」に傾いている(図1-4)。友の会、イギリス、ドイツともに、無作為抽出の新座市民より、全体的に「そう思う」ほうに傾

いており、積極的であると判断出来る。

## 2. 調査対象の基本的属性

### (1) 健康状態

健康状態について、「健康である」「あまり健康とはいえないが、病気ではない」「病気はあるが普通の生活ができる」「病気がちで寝込むことがある」「病気で1日中寝込んでいる」の5項目の結果を、「あまり健康とはいえないが病気ではない」と「病気はあるが普通の生活ができる」をたして総務庁調査の「あまり健康ではないが病気ではない」に対比させて比較した(図2-1)。

「病気がちで寝込むことがある」や「寝込んでいる」が、総務庁調査<sup>7)</sup>および新座市民に比べ、本調査ではほとんどいない。また高齢前期と後期では、イギリス、ドイツ、友の会ともに、後期は前期より「健康である」が減少し、「あまり健康ではないが普通の生活ができる」が増加していた(図2-2)。

### (2) 学校教育年数(図3)

本調査対象者は、イギリス、友の会の高齢前期・後期ともに教育年数が10年から16年以上の高学歴の人が多い。総務庁調査と比較すると、各国ともに、本調査の方

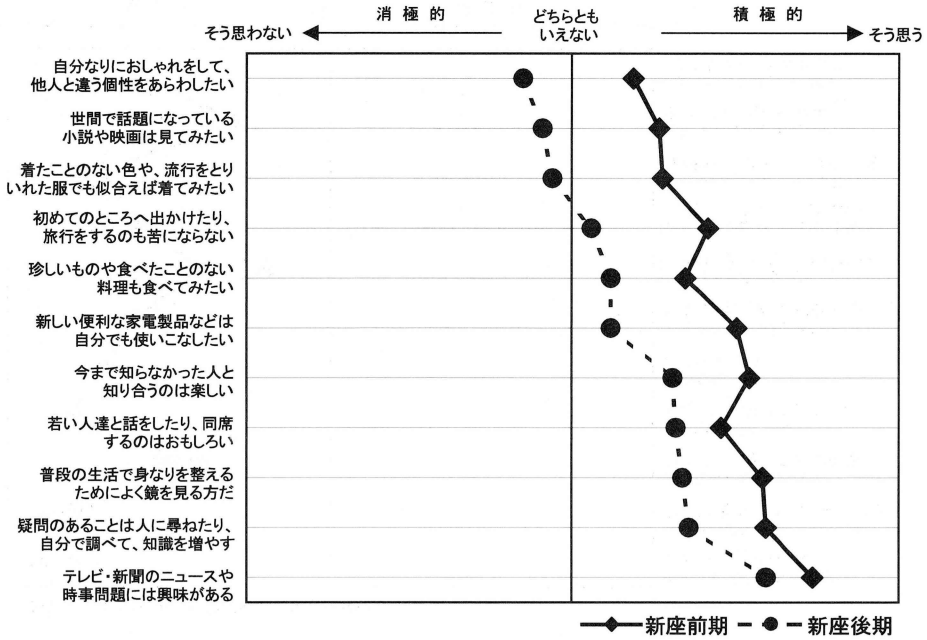


図1-1. 積極的生活態度 新座市高齢前期・後期の比較

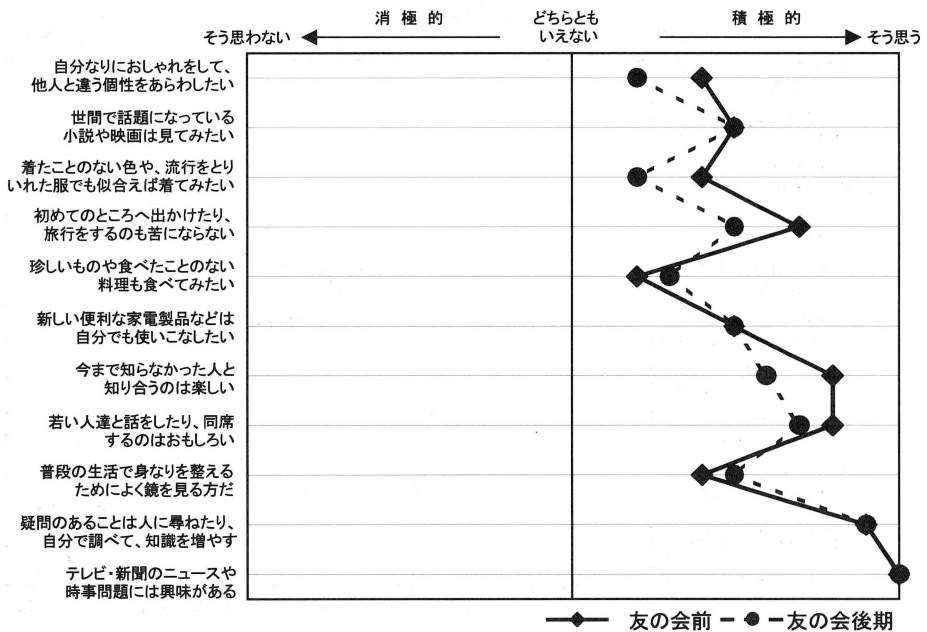


図1-2. 積極的生活態度 友の会高齢前期・後期の比較

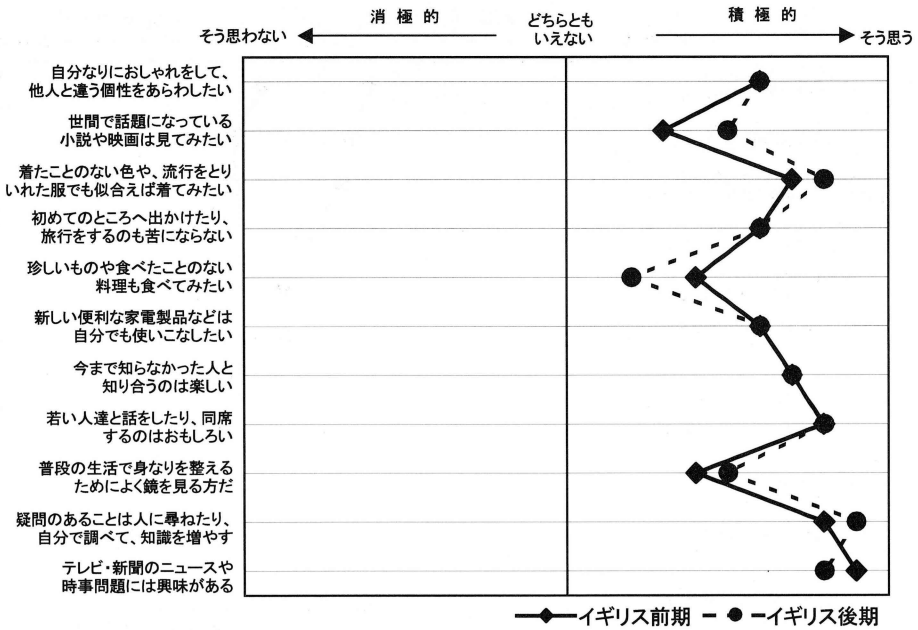


図1-3. 積極的生活態度 イギリス高齢前期・後期の比較

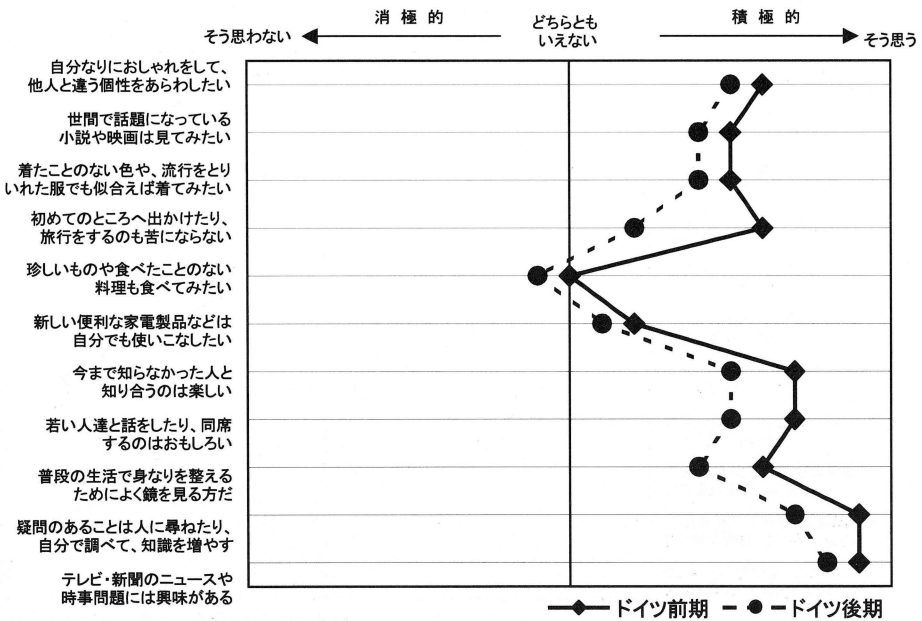


図1-4. 積極的生活態度 ドイツ高齢前期・後期の比較

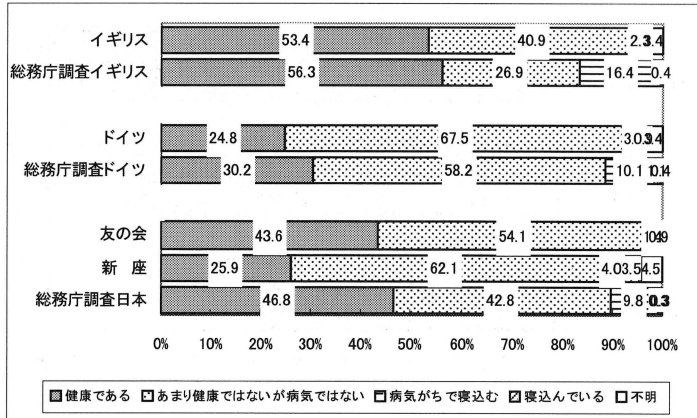


図2-1. 健康状態 総務庁調査・新座と本調査との比較

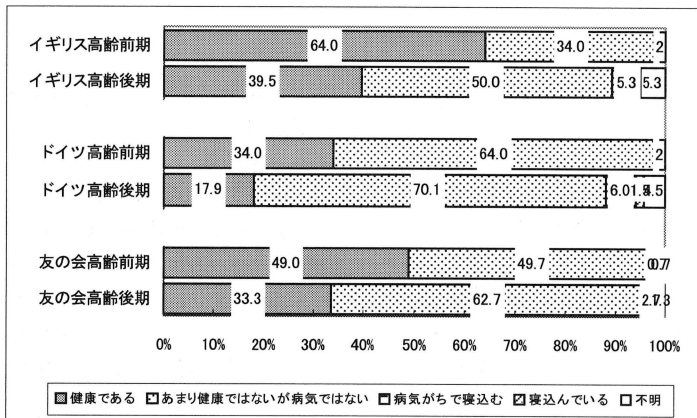


図2-2. 健康状態 高齢前期と後期との比較

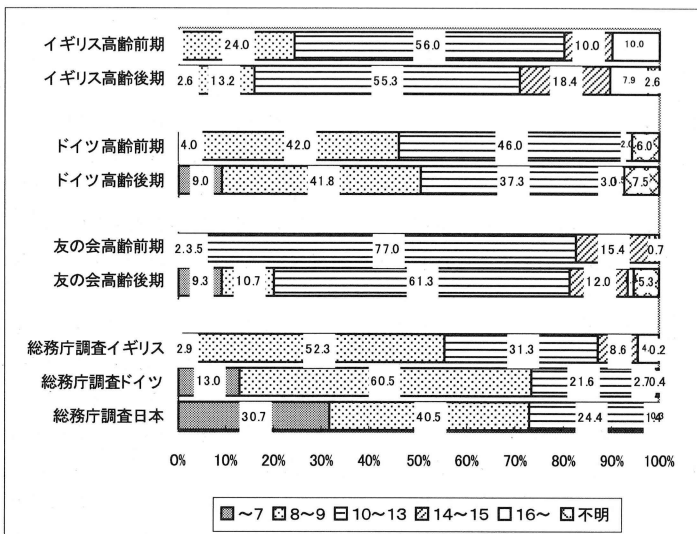


図3. 学校教育年数

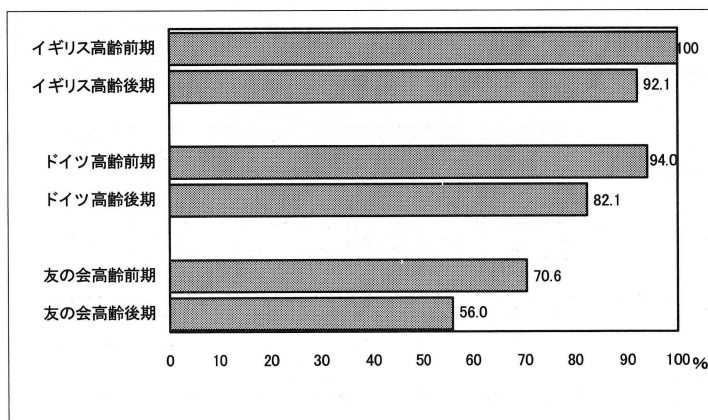


図4. 就業経験ある人の割合高年齢前期と後期との比較

が総務庁調査より高学歴である。

### (3) 就業経験

「就業の経験がある」と答えた人の割合を図4に示した。総務庁調査と比較するとイギリス、ドイツでは、本調査の方が「経験ある」人の割合が多い。

### (4) 家族類型

家族類型は、イギリス、ドイツは、本調査、総務庁調査ともに「独居」が一番多く、「その他の家族との同居」が少ない。それに反し、日本では、友の会、新座、総務庁調査ともに「その他の家族との同居」が一番多く、「独居」が一番少ない(図5-1)。高年齢後期では、イギリス、ドイツ、友の会ともに、「夫婦のみ同居」が減少し、「独居」が増加する。ついで、「その他の家族との同居」が増加する。特に友の会では、「その他の家族との同居」が50.7%に達していた(図5-2)。

## 3. 『老後の生活』のイメージ

『「老後の生活」と言われた場合、どういうことを思い浮かべますか』と言う問いに対し、イギリス、ドイツでは、本調査、総務庁調査ともに「仕事から引退した生活」と「年金生活者としての生活」を加えた割合が約50%～約60%である。次いで、イギリスでは「配偶者と死別した生活」「健康が衰えたあとの生活」などのイメージがある。友の会では、「仕事から引退した生活」2.8%と「年金生活者としての生活」37.6%を加えた割合は、約40%であり、「健康が衰えたあとの生活」の割合が28.4%で、この割合は、総務庁調査(日本)でも、34.6%を示し、いずれもイギリス、ドイツより多い。高年齢前期と後期との比較では(図6)ドイツは大きな変化がないが、イギリス後期では「配偶者と死別した生活」が前期より多く

なり、友の会では、「年金生活者」のイメージが減少し、「健康が衰えた」イメージが増加する。

## 4. 人間関係

### (1) 大切にしたい人間関係

『老後の生活を豊かに過ごすために、現在どのような人間関係を大切にすべきだと思いますか』という設問に対しては図7-1～7-3に示す。

イギリス、ドイツ、友の会ともに、また前期・後期ともに、一番大切にしたい人間関係に「配偶者」と「子供や孫」があげられた。前期では、イギリスと友の会では、配偶者が一番多く、イギリス56%、友の会64.3%であった。後期では「配偶者」が減少し「子供や孫」が多くなる。二番目に大切にしたいのは「子供や孫」が一番多い。三番目に大切にしたいのは、イギリス、ドイツ、友の会ともにまた前期・後期ともに「兄弟や親戚」と「若い頃からの友人」である。イギリスでは、「近隣の人々」はドイツ、友の会より多い。イギリスでは、「近隣の人々」が、二番目に大切に前期28.0%、後期では28.9%であり同じく後期で三番目15.8%である。

### (2) 老後における子や孫とのつきあい観(図8-1, 8-2)

子や孫とのつきあい方は、イギリスでは「時々あって食事や会話をするのがよい」が一番多い。ドイツでは、「時々あって食事や会話をするのがよい」と「たまに合って話をする程度でよい」を加えると70.1%である。総務庁調査(ドイツ)は、前者および後者の合計は79.5%である。友の会では「時々あって食事や会話をするのがよい」が72.5%をしめ、総務庁調査(日本)の30.2%より格段に多い。総務庁調査では「いつも一緒に生活できる

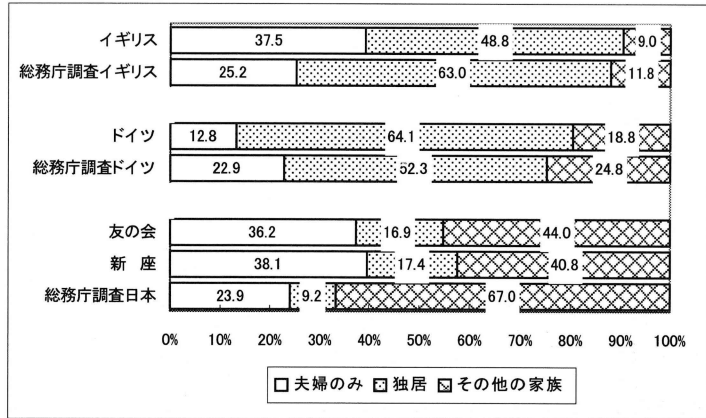


図 5-1. 家族類型 総務庁調査・新座・本調査との比較

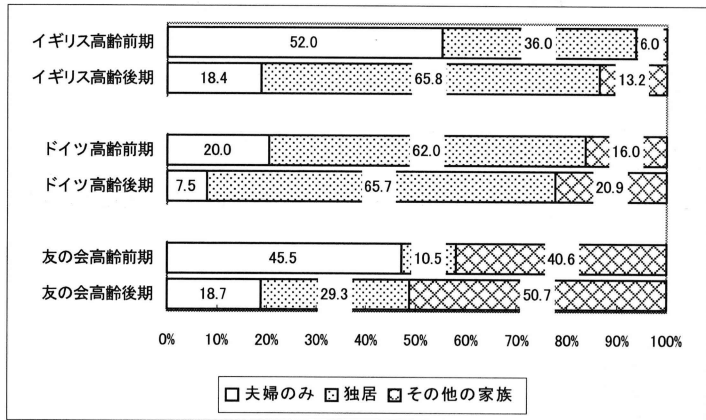


図 5-2. 家族類型 高齢前期と後期との比較

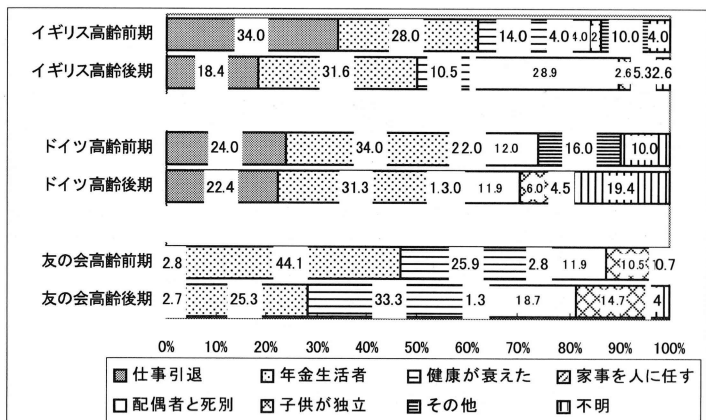


図 6. 老後の生活のイメージ 高齢前期と後期との比較

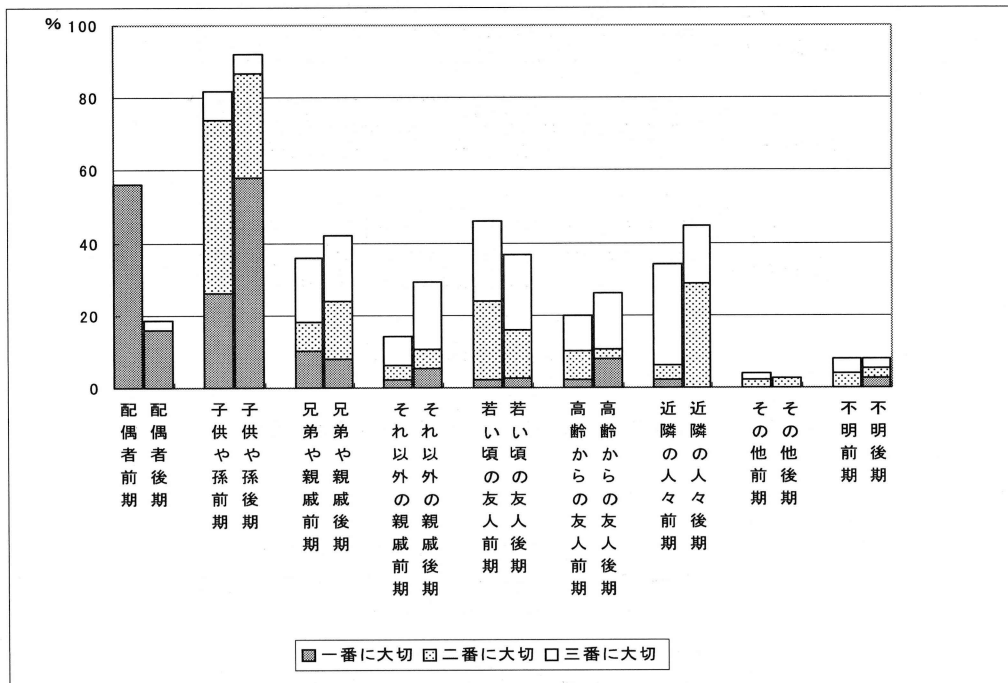


図7-1. 大切に考えている人間関係 イギリス高齢前期と後期との比較

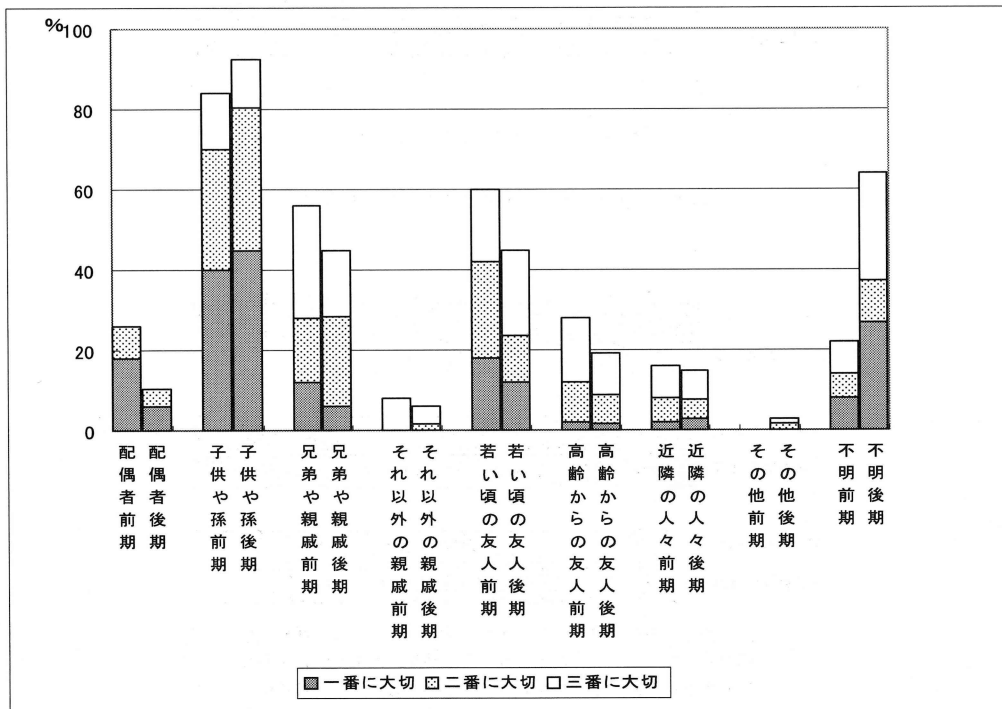


図7-2. 大切に考えている人間関係 ドイツ高齢前期と後期との比較



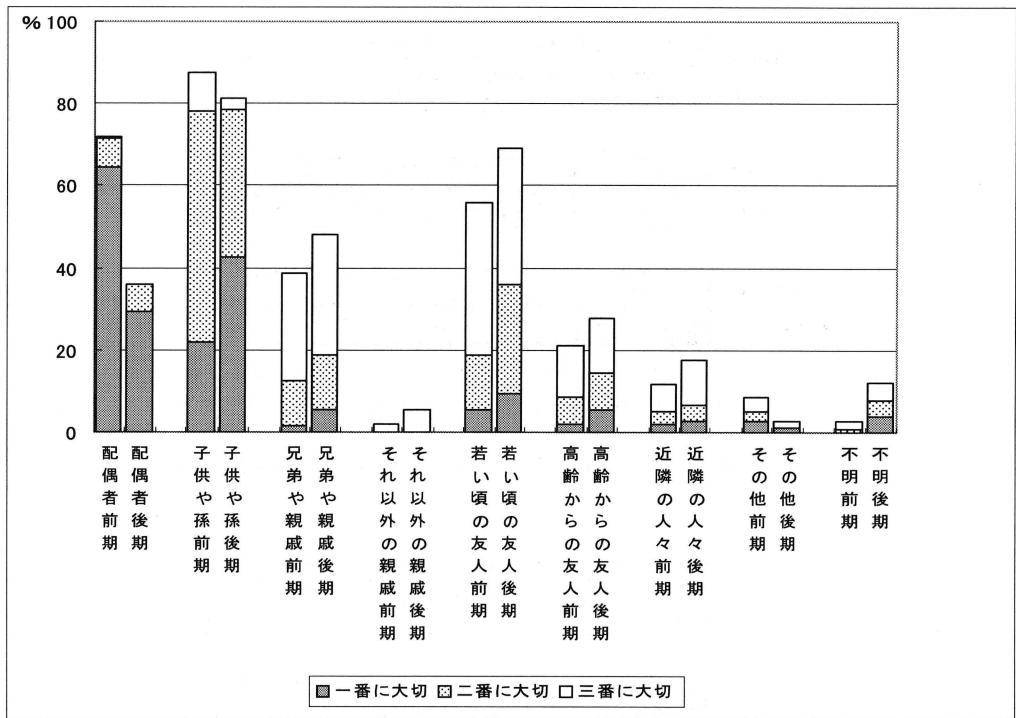


図7-3. 大切に考えている人間関係 友の会高齢前期と後期との比較

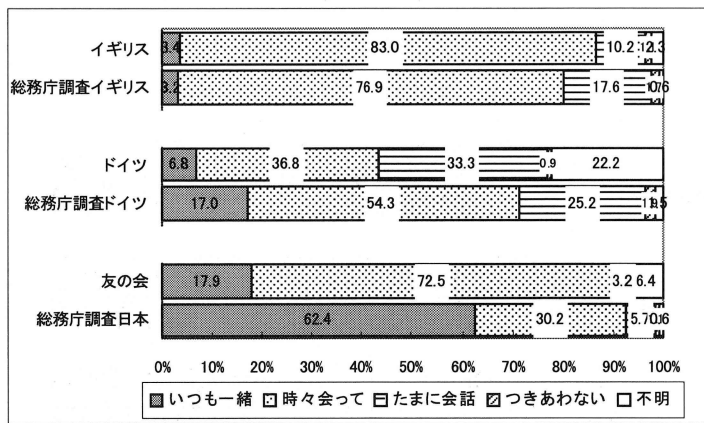


図8-1. 老後における子や孫とのつきあい方総務庁調査と調査との比較

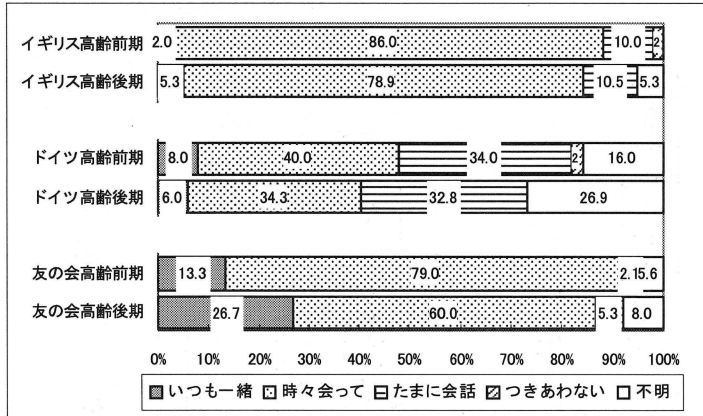
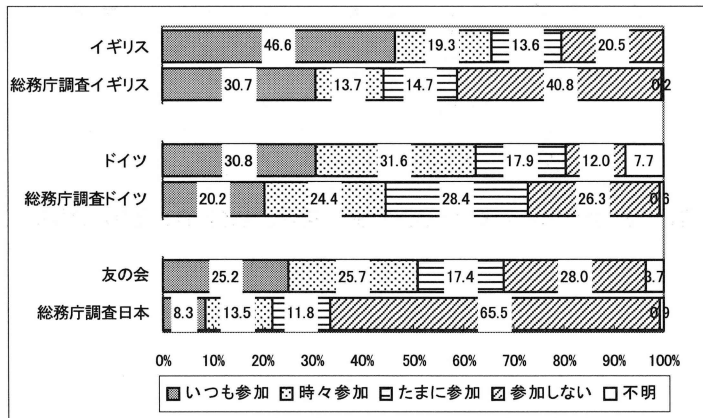
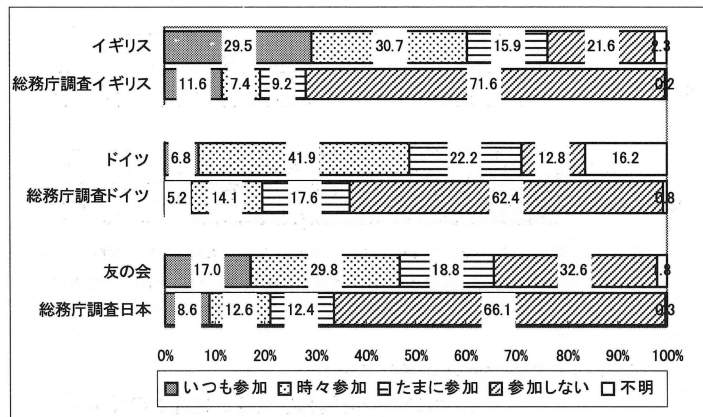


図8-2. 老後における子や孫とのつきあい方 高齢前期と後期との比較



宗教活動への参加



ボランティア活動への参加

図9-1. 社会参加総務庁調査と本調査との比較

のがよい」が62.4%であるが、友の会では17.9%である。「いつも一緒に生活ができるのが良い」という割合は、イギリスは、本調査、総務庁調査（イギリス）ともに約3%である。ドイツは、本調査6.8%、総務庁調査（ドイツ）17.0%であり、イギリス、ドイツは、日本より格段に少ない。

高齢前期と後期との比較では、友の会の後期に「いつも一緒に生活できるのがよい」が倍増する以外は、イギリス、ドイツともに大きな変化はみられない。

## 5. 社会参加

社会参加について今回の調査では、①「宗教活動」、②「地域でのボランティア活動」、③「社交的な集い」、④「老人のグループ活動」という総務庁調査と同じ4項目に「自己啓発や学習のための活動へ参加」という質問を

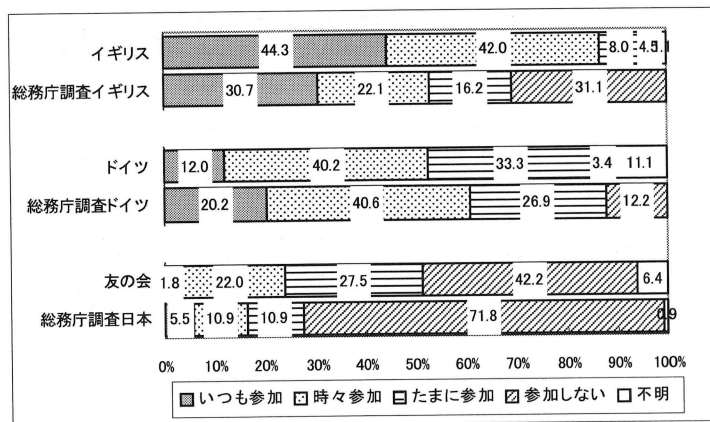
加えて5項目を設問した。どの程度、社会参加をしているかについて、前記4項目を総務庁調査と比較し、5項目については、高齢前期と後期との比較を行った。

### (1) 総務庁調査第3回「高齢者の生活と意識」資料との比較（図9-1、9-2）

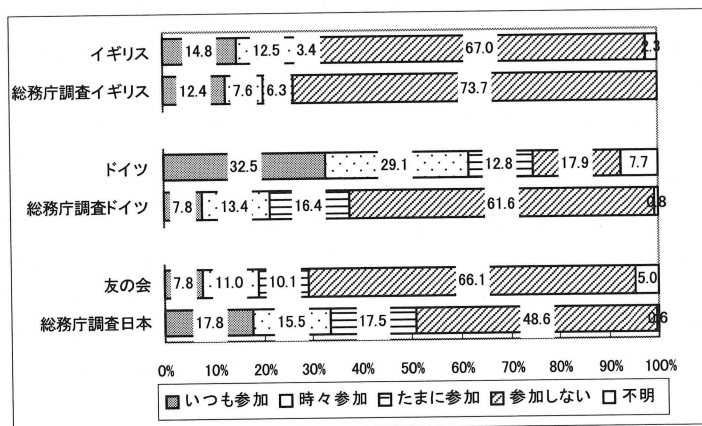
#### ①「宗教活動」

「いつも参加」と「時々参加」を加えた割合が本調査のイギリスでは65.9%、ドイツでは62.4%、友の会では50.9%であり、総務庁調査のイギリス44.4%、ドイツ44.6%、日本21.8%と比べるといずれも本調査のほうが多い。

②「地域でのボランティア活動」「いつも参加」と「時々参加」とを加えた割合は、本調査のイギリスでは60.2%、ドイツでは48.7%、友の会では46.8%であり、

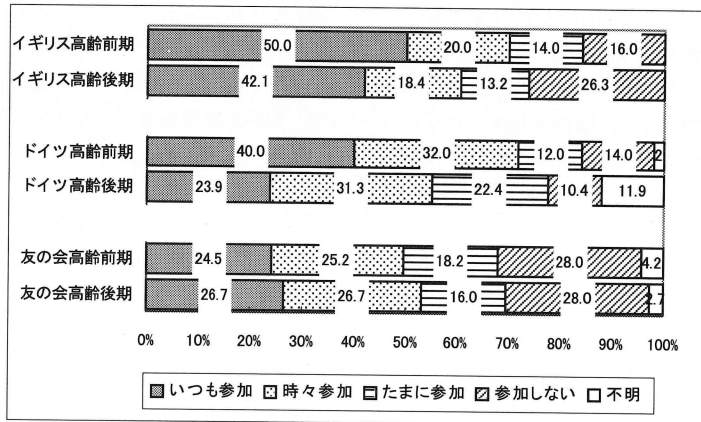


社交的な集いへの参加

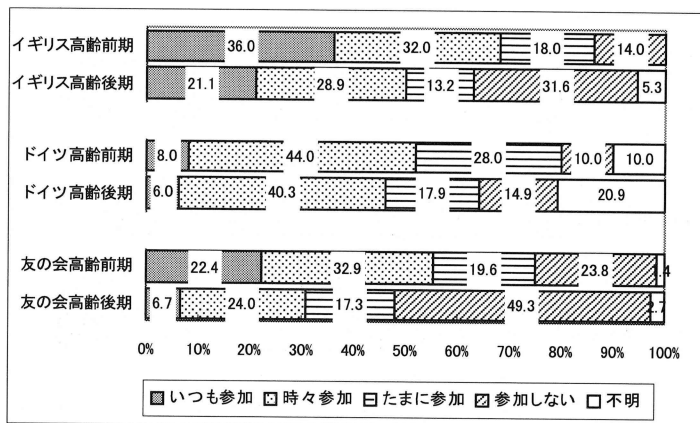


老人のグループ活動への参加

図9-2. 社会参加総務庁調査と本調査との比較



宗教活動への参加



ボランティア活動への参加

図10-1-1. 社会参加高齢前期と後期との比較

総務庁調査のイギリス19.0%，ドイツ19.3%，日本21.2%と比較するといずれも本調査が多い。

③「社交的な集い」「いつも参加」と「時々参加」を加えると本調査のイギリスでは86.3%，ドイツでは、52.2%，友の会では、23.8%である。総務庁調査のイギリスは52.8%，ドイツは60.8%，日本は16.4%である。

#### ④「老人グループ活動」

「いつも参加」と「時々参加」を加えると本調査のイギリスでは27.3%，ドイツでは61.6%，友の会では18.8%である。総務庁調査のイギリスは20.0%，ドイツ21.2%，日本33.3%である。

#### (2) 高齢前期と後期との比較 (図10-1-1, 10-1-2)

年齢による影響を把握するために、前期高齢者と後期

高齢者とを分けて検討した結果は次のとおりである。

#### ①「宗教活動」

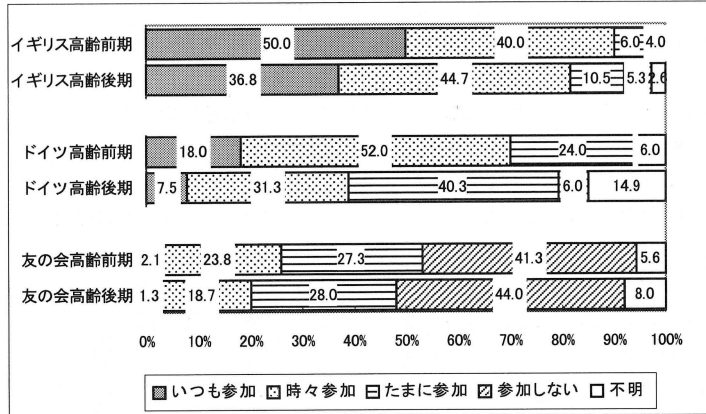
「いつも参加」と「時々参加」を加えると本調査の前期ではイギリス70%，ドイツ72.0%，友の会49.7%であり後期では、イギリス60.5%，ドイツ55.2%，友の会53.4%である。

#### ②「ボランティア活動への参加」

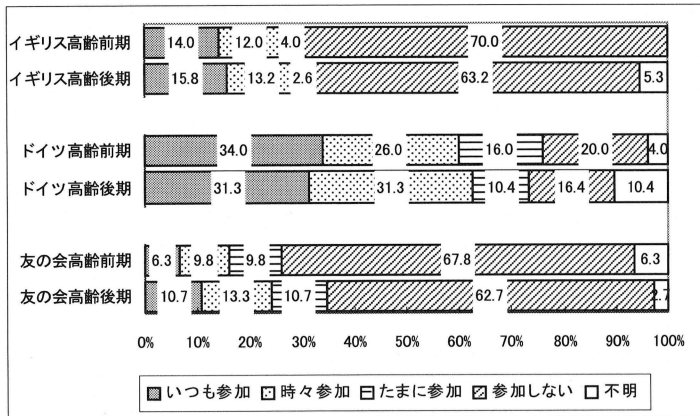
「いつも参加」と「時々参加」を加えると前期ではイギリス68.0%，ドイツ52.0%，友の会55.3%である。後期では、イギリス50.0%，ドイツ46.3%，友の会30.7%である。

#### ③「社交的な集いへ参加」

「いつも参加」と「時々参加」を加えると、前期では、イギリス90.0%，ドイツ70.0%，友の会25.9%，後期で



社会的な集いへの参加



老人グループ活動への参加

図10-1-2. 社会参加高齢前期と後期との比較

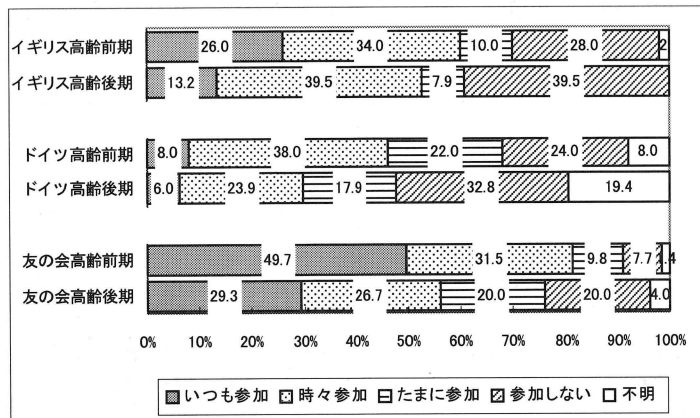


図10-2. 自己啓発や学習のための活動への参加  
高齢前期と後期との比較

は、イギリス81.5%、ドイツ38.8%、友の会20.0%であり友の会が前期・後期ともに少ない。

④「老人グループ活動」

「いつも参加」と「時々参加」を加えると、前期では、イギリス26.0%、ドイツ60.0%、友の会16.1%、後期では、イギリス29.0%、ドイツ62.6%、友の会24.0%であり、イギリスおよび友の会は前期・後期ともにドイツより少ない

⑤「自己啓発や学習のための活動へ参加」(図10-2)

「いつも参加」と「時々参加」を加えると、前期では、イギリス60%、ドイツ46.0%、友の会81.2%、後期では、イギリス52.7%、ドイツ29.9%、友の会56.0%である。友の会が前期・後期ともに一番多い。

6. 人のために何か役立つことをしているか(図11)

「自分以外の人のために何か役立つ事をしてしていますか」のマルチアンサーの設問に対し、イギリス、ドイツ、友の会の前期・後期ともに、「家族のために」が一番多く、イギリス前期80%、後期68.4%、ドイツ前期66.0%、後期50.7%、友の会前期76.2%、後期61.3%である。次いで、「友人知人のため」がイギリス前期50%、後期34.2%、ドイツ前期44.0%、後期26.9%、友の会前期39.9%、後期28.0%である。「地域のため」、「親類のため」がこれに続く。ほとんどの人が『何らかの役に立っ

ている』と答えている。各個人を見ると、前期では平均2つ以上、後期では1.7以上の項目で役立っていると答えている。

7. 今後も続けたいライフワーク(図12)

『自分のライフワークともいうべき、これからずっと続けたいことがありますか』の問いに対し「はい」と答えた割合は、イギリス前期42%、後期28.9%、ドイツ前期54.0%、後期28.4%。友の会前期81.8%、後期72.0%であり、前期・後期ともに友の会が多い。

8. 目標や希望(図13)

『現在、めざしている目標やかなえたい希望がありますか』と言う問いに対しては、「はい」と答えた人が、イギリス前期54.0%、後期39.5%、ドイツ前期60.0%、後期46.3%、友の会前期80.4%、後期68.0%である。

9. 健康状態との関連

健康状態との関連を調べた結果はつぎのとおりである。

「健康である」、「健康とは言えないが病気ではない」、「病気はあるが普通の生活ができる」という3つの健康程度を取り上げ、それらの人の中で『ライフワーク』や『目標やかなえたい希望』があると答えた人の割合をそれぞれ調べた。

(1) 健康状態と『ライフワーク』との関係(図14-1)

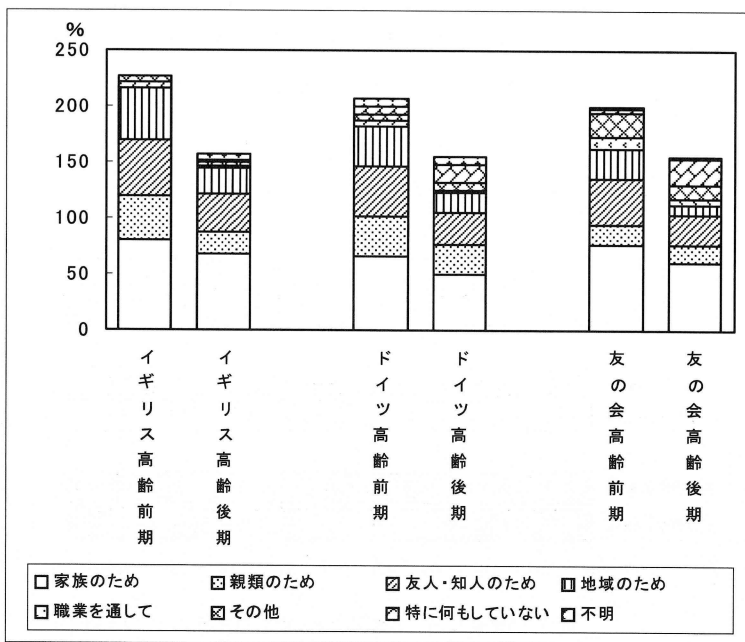


図11. 人のために何か役立つことをしていますか  
高齢前期と後期との比較

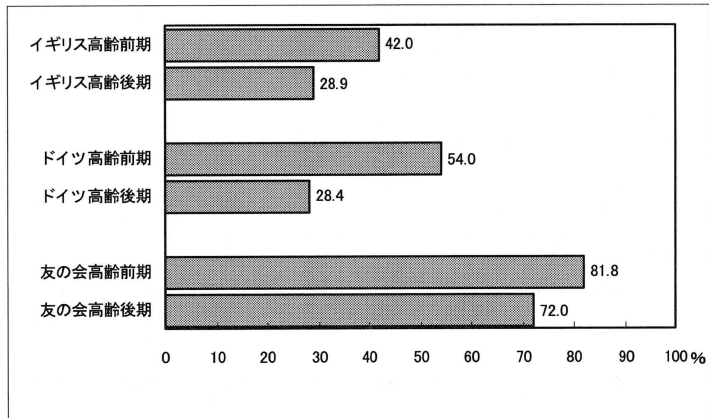


図12. これからずっと続けたいライフワークがある人の割合

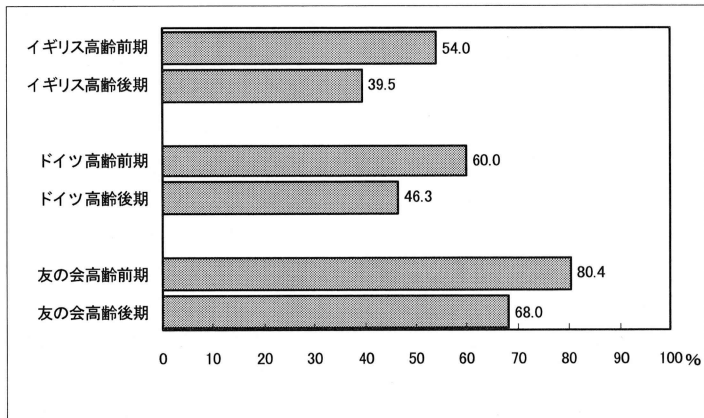


図13. めざしている目標やかなえたい希望のある人の割合

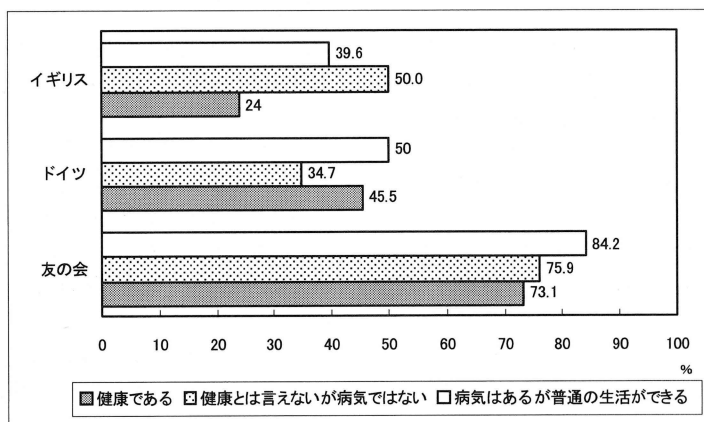


図14-1. 健康状態と『ライフワーク』との関係

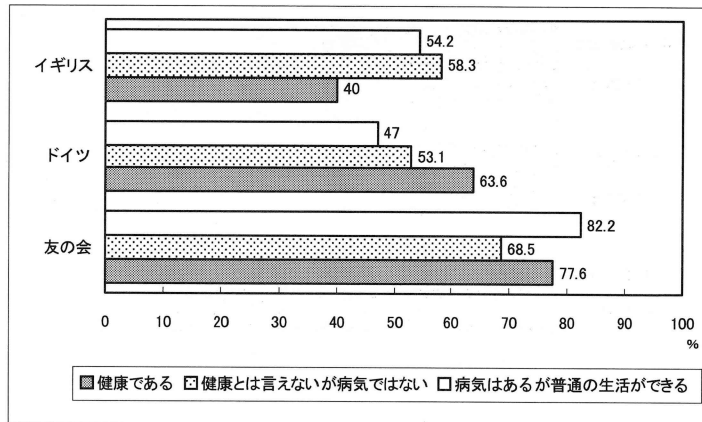


図14-2. 健康状態と『目標やかなえたい希望』との関係

「健康である」、「健康とは言えないが病気ではない」、「病気はあるが普通の生活ができる」という3つの健康程度の順に『ライフワーク』のある割合を述べると、イギリスでは、24.0%、50.0%、39.6%、ドイツでは、45.5%、34.7%、50.0%、友の会では、73.1%、75.9%、84.2%である。

#### (2) 健康状態と『目標やかなえたい希望』との関係 (図14-2)

「健康である」、「健康とは言えないが病気ではない」、「病気はあるが普通の生活ができる」という3つの健康程度の順に『目標やかなえたい希望』のある割合を述べると、イギリスでは、40.0%、58.3%、54.2%、ドイツでは、63.6%、53.1%、47.0%、友の会では、77.6%、68.5%、82.2%である。

## IV. 考察

### 1. 積極的生活態度

「新しいことに挑戦する態度」「知識を増やし自己実現をはかろうとする態度」「好奇心」などの観点から設問し、これにより積極的生活態度を測ろうと試みた。その結果、無作為抽出の新座市民と比較し、本調査で対象としたイギリス、ドイツ、友の会の人々は、前記観点からみると積極的な方にかたむいていることが分かった。また、新座市調査は、高齢前期と後期に差があり年齢の影響がうかがえるが、本調査の対象は、前期と後期との差異は、ドイツ、日本においてそれぞれ1項目について有意差が見られるのみで差がない。高齢後期となっても、積極的生活態度を持ち続けている人々が対象として選ばれたといえる。

### 2. 調査対象の基本的属性

健康状態については、本調査の対象が無作為抽出の総務庁調査<sup>7)</sup>および新座市調査<sup>14)</sup>の対象と異なることは「病気がちで寝込んでいる」と「寝込んでいる」人がほとんどいないことである。すなわち、ほとんどの人が「健康である」か「あまり健康ではないが普通の生活ができる」人たちであった。しかし、高齢後期になると、イギリス、ドイツ、友の会ともに「健康である」が減少し「あまり健康ではないが普通の生活ができる」人が増加している。このことから、今回調査対象者は健康に恵まれた人たちであるが、寝込んでいなければ、また、あまり健康でなくても普通の生活が出来れば、積極的に生きられるともいえよう。

学校教育年数は、本調査対象者は、総務庁調査と比較して、高学歴のひとが多いといえる。特に高齢後期の人でも、イギリス、友の会では、学校教育を14年以上受けている人が多いことが特徴といえる。

就業経験については、イギリス、ドイツは、本調査の方が総務庁調査より就業経験が多いが友の会は少ない。これは友の会の特徴と言える。

家族類型は、イギリス、ドイツでは、「独居」が一番多い。「夫婦のみ同居」を加えればほとんどの人が高齢者のみで暮らしている。これに反し日本では、「その他の家族と暮らす」人が一般的に多いが、友の会の特徴は、「夫婦のみ同居」がイギリスとほぼ同じであることである。総務庁調査と比較すると、本調査の家族類型の特徴は、総務庁調査よりも、イギリスでは「夫婦のみの同居」が多いこと、ドイツでは、「独居」が多いこと、友の会では、「独居」が総務庁調査(日本)の約2倍である。また「夫婦のみ同居」と「独居」を足した割合が「その他の家族との同居」より多いことである。子供などと同居して暮



らす高齢者が約67.0%をしめる総務庁調査（日本）と比較すると友の会では、自立して高齢者のみで生活している人が多いと言うことが出来る。新座市の1984年と1989年の家族類型の推移を見た文献では<sup>13)</sup>5年間に「夫婦のみ同居」の割合が10.4%から19.8%に増加していた。このことは、日本においても、独立した子どもと同居しない夫婦が増えたということで、この傾向が友の会では、かなり欧米型に近づいているといえる。

### 3. 老後の生活のイメージ

イギリス、ドイツでは、老後の生活のイメージは、「仕事から引退した生活」と「年金生活者としての生活」が大きい。友の会では「年金生活者としての生活」の割合が一番多く、「仕事から引退した生活」の割合は小さい。このことは友の会の女子の特徴といえる。また、友の会、総務庁調査（日本）ともに「健康が衰えたあとの生活」のイメージがつよいのが日本の特徴であろう。このことは、介護の問題が大きくクローズアップされている日本人の不安<sup>8)</sup>のあらわれではないかと思われる。

### 4. 人間関係

一番大切にしたい人間関係を一つだけ答えてもらった結果は、イギリス、友の会ともに高齢前期は「配偶者」であった。ドイツ前期では、「子供や孫」が「配偶者」より多かったのは、「夫婦のみ同居」の割合が、イギリス、友の会の半分以下であるためであろう。

高齢後期になると、イギリス、ドイツ、友の会ともに、「配偶者」が減少し、「子供や孫」が増加する。このことは、配偶者と死別する人が増加するためではないかと思われる。

2番目に大切にしたい人間関係は、イギリス、ドイツ、友の会、前期・後期ともに、「子供や孫」である。同居・別居に関係なく「子供や孫」との人間関係は大切にしたいと思っている。「兄弟や親戚」「若い頃からの友人」もあげられ、イギリス後期では、「近隣の人々」もあげられる。

3番目になると、大切にしたい人間関係は、分散し、多岐にわたる。個人の多様な人間関係がうかがわれる。友の会では「若い頃からの友人」が他に比べて多いのは、友の会で若い頃から活動している人が多く交流が継続されているためではないかと推察される。

以上のように、大切にしたい人間関係は、「配偶者」や「子供や孫」であった、それでは、「子供や孫」とは、どんな付き合いかたがしたいのか訊ねた。

その結果、本調査のイギリス、友の会は「時々あって食事や会話をする」つきあい方が好ましく思っている割合が一番多い。この傾向は、総務庁調査（イギリス）と

本調査イギリスでは同じである。しかし日本では、「いつも一緒に生活出来る」ことを希望する人が一番多い総務庁調査（日本）とは、大きく異なっている。第4回総務庁調査<sup>8)</sup>の、「都市規模別に見た家族との付き合い観」では、欧米諸国では都市規模に関係なく「別居型交流」である。日本の大都市では「いつも一緒に生活出来る」希望は、他の規模の小さい都市と比較して少なく「別居型交流」が多いと述べている。また「家族類型別にみた家族とのつきあい観」では、「単独世帯」および「夫婦のみ世帯」が他の家族類型より「いつも一緒に生活する」割合が格別に少ない結果であった。このことから、友の会の「別居型交流」の割合が多いことは、「都市規模が大きい地域に在住し」「同居+夫婦のみ同居の割合が多い」と関連があると思われる。また、ドイツの本調査では、「時々あって食事や会話をする」と「たまに会って会話をする程度でよい」がほぼ同じくらいであり、イギリス、友の会と異なる傾向である。いずれにしても、本調査対象者は、3カ国ともに「子や孫といつも一緒に生活できる」事をあまり望んではいないようである。しかし高齢前期と後期とを比較すると、イギリス、ドイツではあまり変化がないが、友の会では、「時々あって食事をする」が減少し「子や孫といつも一緒に生活できる」が倍増する。このことから、日本では、欧米型に近づいているとはいえ、友の会でも年老いたら「同居型交流」を望んでいる割合が増えるということがわかる。

### 5. 社会参加

本調査では、「宗教活動」「ボランティア活動」はイギリス、ドイツ、友の会ともかなり多くの人に参加しており、いずれも総務庁調査より多い。「社会的な集い」については、イギリス、ドイツは多く、友の会は少ない。「老人のグループ活動」では本調査のドイツでは、イギリス、友の会に比して際だって多い。友の会では、友の会の活動が活発なので「社会的な集い」「老人のグループ活動」が少ないのではないかと推察される。また、ドイツで「老人のグループ活動」が多いのは、調査対象の平均年齢が高いことも影響しているかとも思われる。

「自己啓発や学習のための活動への参加」については、イギリス、ドイツ、友の会ともに、多く参加しており、高齢前期のほうが、後期より多い。友の会では、この種の活動が多いと思われるので、この項目は、前期・後期とも際だって多いのだと思われる。

「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果」<sup>16)</sup>によると一般住民調査と社会参加の活動者調査とを比較すると、「生きがい（喜びや楽しみ）を十分感じている」割合が前者は41.8%に対し後者では68.7%であっ

た。また、「生きがい（喜びや楽しみ）を感じる時」を9項目について複数回答を求めた結果では、女性については、一般住民では一番多いのが「孫など家族との団らんの時」51.5%、ついで「友人や知人と食事・雑談しているとき」45.1%であり、「社会奉仕や地域活動をしている時」はわずかに9.8%であった。社会参加の活動者は、「社会奉仕や地域活動をしている時」78.4%、ついで「友人や知人と食事・雑談しているとき」64.7%「孫など家族との団らんの時」64.7%である。その他の項目についても一般住民より、どの項目も割合が高かった。特に「勉強や教養などに身を入れている時」は、一般住民10.3%に対し活動者は、42.1%であった。このことから社会参加をしている人は、生きがいを感じる時が多いと思われる。本調査の対象者は、複数の社会参加をしている人たちであったので、生きがい（喜びや楽しみ）を感じる時が多いのではないかと推察される。

#### 6. 今後の生活に対する意識

現在の生活では、イギリス、ドイツ、友の会ともに、高齢前期・後期いずれも、家族、親類、友人知人、地域のために、人に役立っているという意識を持っており、ライフワークがあり、目標やかなえたい希望がある。特に友の会において顕著である。このことは、現在および今後の生活の生き甲斐になっていると思われる。

先行の私共の一般高齢者調査<sup>9)11)14)</sup>では、「生き甲斐」を聞いたところ、一番に「健康に暮らすこと」と答えた人が多かった。また「いきいきと生きるために大切なこと」の問いには約93%の人が「健康」と答えている<sup>14)</sup>。

また、「高齢者の生きがいに関する調査」<sup>17)</sup>では、「老後を明るく生きていくために是非必要なもの」8項目のなかで「自分および家族の健康」をあげた人が一番多く72%であった。

そこで、健康でなければいきいきと生きられないのか、健康状態との関連をみた。

「健康である」「健康ではないが病気ではない」「病気はあるが普通の生活ができる」の3つの健康状態について、「ライフワーク、目標やかなえたい希望がある」と答えた人の割合を調べた結果では、3つの健康状態毎の割合は、あまり差がなく、病気があっても普通の生活が出来れば、生き甲斐をもって生きられると思われる。

#### V. 結論

積極的生活態度をもって生活していると思われる高齢女子の「意義ある生活をもたらす要因」を見いだすことを目的にして、特に高齢前期と後期とを比較して検討した主な結果のうち、本調査のイギリス、ドイツ、友の会

ともに共通して言えることは、つぎのとおりである。

1. 本調査対象者は、一般市民と比較して、高齢前期・後期ともに、より積極的生活態度を持っている。
2. 総務庁調査と比較して、健康状態が良く寝たきりの人は少ない。高齢後期は前期に比し健康である割合が減少するが、寝たきりの人は少ない。
3. 総務庁調査と比較して高齢前期・後期ともに学校教育年数が多い。
4. 大切にしたい人間関係は、高齢前期・後期ともに、配偶者、子や孫である。
5. 総務庁調査と比較して高齢前期・後期ともに社会参加が多い。前期と後期とを比較すると多少後期の方が少なくなる。
6. 高齢前期・後期ともに、人に役立っているという意識を持ち、ライフワーク、目標やかなえたい希望がある。

以上のように、積極的生活態度を持って生活している人は、高齢前期と後期とを比較して多少の差はあるものの大きな変化はなかった。また、健康は大切ではあるが、たとえ病気を持っていたとしても、普通の生活が出来れば、生き甲斐を持って生活できることがわかった。

今回の調査の結果から、高齢者が、積極的生活態度をもって生きるための要因として、①人間関係を大切にすること、②社会参加をすること、③人の為に役だっている意識がもてること、④目標や希望があること、などが重要であると思われる。今後、デンマーク、スウェーデンの資料を加えて、高齢者に意義ある生活をもたらす要因について、さらに解明したいと考えている。

#### 引用文献

- 1) 折茂肇ほか160名：新老年学 第4刷，東京大学出版会（1993）
- 2) 日本老年社会科学会：老年社会科学，Vol. 1～22（1979-2000）
- 3) The Gerontological Society of America：the Journals of gerontology（1945-2000）
- 4) The Gerontological Society of America：THE GERONTOLOGIST. Vol.54B（1999）
- 5) 内閣総理大臣官房老人対策室：老人の生活と意識，国際比較調査結果報告書（1982）
- 6) 総務庁長官官房老人対策室：老人の生活と意識，国際比較調査結果報告書，中央法規出版（1987）
- 7) 総務庁長官官房老人対策室：老人の生活と意識，第3回国際比較調査結果報告書（1991）
- 8) 総務庁長官官房高齢社会対策室：高齢者の生活と意

- 識, 第4回国際比較調査結果報告書(1997)
- 9) 古松弥生・木寺博子・柳許子・藤井敏信・横田京・狩野敏也・佐藤元: 高齢者の生活形態における変容傾向の家政学的研究, 課題番号59450078, 文部省科学研究費補助金(一般研究B) 研究成果報告書(1987)
- 10) FUJII, Tosinobu ; FURUMATSU, Yayoi ; KIDERA, Hiroko ; YANAGI, Kiyoko ; YOKOTA, Kyo ; KANO, Toshiya ; SATO, Hajime : Method of Analyzing the Aging Population, Jumonjigakuen Jyosi Tankidaigaku Kenkyu Kiyou, Vol. 20(1989)
- 11) 古松弥生・宮城道子・木寺博子・柳許子・横田京・藤井敏信・佐藤元・狩野敏也・波多野和彦: 新座市における在宅高齢者の生活実態について—新座市高齢者生活実態調査より—, 十文字学園女子短期大学紀要, 第22集, 35~58頁(1991)
- 12) 古松弥生・宮城道子・木寺博子・柳許子・横田京・藤井敏信・佐藤元・狩野敏也・波多野和彦: 東京近郊地域における高齢者の生活変化について—新座市における高齢者生活実態調査(1984年および1989年)より—, 十文字学園女子短期大学高齢者問題生活研究会報告書(1993)
- 13) 古松弥生・横田京・宮城道子: 高齢者に意義ある生活をもたらす要因に関する事例的研究—アメリカ・イギリス・ドイツ・ルクセンブルグにおける調査—, 十文字学園女子短期大学紀要, 第25集, 123~163頁(1994)
- 14) 宮城道子・古松弥生・横田京・亀田温子・波多野和彦: 新座市における在宅高齢者の生活と意識について—第3回新座市高齢社会生活調査(その1・高年層)より—, 十文字学園女子短期大学紀要, 第26集, 129~154頁(1995)
- 15) 亀田温子・古松弥生・横田京・宮城道子・波多野和彦: 高齢社会に向けての中年層の意識と生活—第3回新座市高齢社会生活調査(その2・中年層)より—, 十文字学園女子短期大学紀要, 第26集, 155~174頁(1995)
- 16) 総務庁長官官房高齢社会対策室: 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査結果(1998)
- 17) 長寿社会開発センター: 高齢者の生きがいに関する施策・事例および関連調査資料集(1992)

#### ABSTRACT

##### Purpose

The purpose of this study is to find the factors

concerning the well being of the elderly women.

We searched for the elderly who have positive attitude of life.

This survey was carried out at York (England), Heidelberg (Germany) and Tokyo and suburban of Tokyo (Japan) in 1994-'95.

##### Methods

We investigated elderly women in homes, 88(U.K.), 117(Germany), 218(Japan) using questionnaires. We divided them into two groups, (64~74 years old and over 75 years old) respectively according to their countries.

Compared the subjects who have positive attitude of life with general citizens\* and compared 64~74 years old subjects with over 75 years old subjects.

We studied 4 items of fundamental attribute and 11 items of life and attitude.

##### Results

The main results common in England, Germany and Japan are as follows:

1. Comparison between the subjects who have positive attitude of life and the general citizens :
  - ① The subjects have more positive attitude of life and good health than the general citizens and nobody stays in bed all the time.
  - ② The subjects have longer education than the general citizens.
  - ③ The subjects have more participation in social activities than the general citizens.
2. Comparison between 64~74 years old and over 75 years old :
  - ① Over 75 years old women have more decreasing ratio of good health than 64~74 years old women but nobody stay in bed all the time.
  - ② Over 75 years old women have increasing ratio of living alone.
  - ③ They think the human relations with their spouse, children and grandchildren are important. It is common in both age groups.
  - ④ It is common in both age groups that they participate in social activities ( religious activities, community volunteer activities, social gatherings, elderly group activities).
  - ⑤ It is common in both age groups that they have their life work, keeping hope and having

purpose of their own life and having consciousness to help other people.

The elderly who have positive attitude of life have small deference by age.

The factors concerning the well being of the elderly are human relations with family, participation in social activities, and keeping hope and purpose of their own life and having their consciousness to help other people.

The health is important. But not having good health, they can lead a life worth living if they can

live ordinary daily life.

\*The third investigation of the Management and Coordination Agency.

Keyword :

England, Germany and Japan. elderly women. positive attitude of life.

elderly women's worth living life.

Comparison between 64~74 years old and over 75 years old